

【一般演題4】 第21席

「針灸古文献に見る口腔の経穴考」

京都 猪飼 祥夫

[目的]

針灸治療において、口腔の経穴は『黄帝内経』の時代から使用されてきた。その後『甲乙経』『千金要方』『類経』では、さらに多くの経穴が使用されている。しかし、その多くの経穴は、現代ではあまり臨床に応用されているようにはみられない。そこでもう一度針灸古文献によって再評価が必要になるのではないかと思われ、研究を行った。

[方法]

古代から現代に至る針灸文献を再検討して、経穴の位置と主治と弁証について考察を加える。それらの経穴を臨床で応用する可能性を検討する。

[主に検討した経穴]

脣裏（口腔の前面で下唇の内側、正中線上）、聚泉（舌上の中央）、金津玉液、上顎（口腔の前面で上唇の裏、正中線上）、齶交、舌下（舌の下で両側を挟む）、頬裏（口腔内の頬の粘膜の上、口角から約1寸）、海泉（舌下の中央脈の上）、舌柱（海泉と同じか）、懸命（一名鬼禄、上唇の中央の絃の上、上顎と同じか）、燕口（口角にとる）など、奇穴を中心に検討した。

[弁証的理解]

手の陽明大腸経は、「下歯の中にはいり、また出て口を挟んで人中で交わる」。足の陽明胃経は、「上歯の中に入り、また出て口を挟み唇をめぐり、下って承漿で交わる」。足の太陰脾経は、「舌の本に連なり、舌の下に散る」。足の少陰腎経は、「舌の本を挟む」。足の厥陰肝経は、「頬裏に下がって、脣の内をめぐる」。腎脈は、齶交にいたる。任脈衝脈は「分かれて、脣口を絡う」。手の少陰心経の絡は「舌本に係わる」。足の太陽の経筋は、「支は分かれて入り、舌の本に結ぶ」。手の少陽の経筋は、「入って舌の本に係わる」。

[考察]

多くの経絡や経筋が口腔や舌に係わっており、そこに存在する経穴も単に口腔だけの疾病治療に役立つだけでなく、弁証的に捉えるとさらなる効果がのぞまれる。しかし、その経穴については位置だけでなく、主治についても確定していない。手技に至ってはほとんど議論されていない。

[結語]

今回報告する口腔内の経穴は、針灸古文献に見るものが主体である。ここでは、基本的な位置と主治を文献的に報告して、議論を高めていきたいと思っている。また、手技についても参考資料として報告する。